

連載 プロマネの現場から 第 89 回 カフェ文化が育んだもの

蒼海憲治 (大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

ウィーンでのカフェ巡り、ブダペストのカフェ・ニューヨーク、プラハのカフェ・モンマルトル等、このところカフェに嵌っています。また、最近のセミナーでは議論を活発化させるための方法として、「ワールドカフェ」方式なるものが入り入れられるようになりました。カフェの持つ良さを会議に適用し、みんなの意見を引き出そうとするブレイン・ストーミングの有効な手法と捉えています。

そこで、そもそものカフェ文化とはどういうものなのかを知りたくなり、数冊、カフェ、コーヒーにまつわる本を手に取りました。意外にも、その奥深さと多様さに驚いたこともあり、今回は少しカフェ文化について紹介してみたいと思います。

まず、ヨーロッパにおけるカフェ文化の発祥の地ともいえるロンドンを見てみます。

イギリスと言うと、コーヒーよりも紅茶の印象がありますが、実は、紅茶文化以前に、コーヒー文化が花開いていました。

1. ロンドンのコーヒーハウス

白井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る—近代市民社会の黒い血液』(*1) では、ロンドンのコーヒーハウスの様子が描かれています。

ロンドンのコーヒーハウスとは、どういうものであったか？

1652年、ロンドンの一隅に一軒のコーヒーハウスが誕生した。いったん受け入れられたコーヒーハウスは、1683年には3000軒、1714年には約8000軒に達した。

このロンドンには、新種の公的世界が出来上がりつつあった。市民的公共性の世界、市民社会である。

当時の大英帝国は、7つの海をオランダと競う商業資本主義国だった。そのため、商人は世界各地の様々な情報に通じている必要があったが、情報を得ようとも、17世紀中葉、イギリスには王政府発行の新聞しかなかった。しかし、そんな情報は役に立たなかった。ホットな情報の詰まった新聞がほしい。新聞を作る場所は、コーヒーハウスだった。

新情報を得るもう一つの手段に、手紙がある。しかし、1678年にできた国の郵便制度は、配達がいい加減で、まだ整っていない。もっと信頼できる郵便制度として、1680年、コーヒーハウスに依拠した1ペニー郵便制度ができる。コーヒーハウスに袋が掛けてあり、手紙を出し

たい人はその袋に入れる。定期的を集められ、配達される仕組みだった。

商人が世界を渡り歩くためには、お金が必要となる。そのお金を工面するのに、株の売買をしたい。しかし、株式取引所がない。ジョナサン・コーヒー・ハウスでは、1697年、専門の証券仲買人を雇い入れ、顧客の相談に応じ、助言を与える便を図った。また、商品取引所の役割を果たしたコーヒーハウスもあった。

海外活動を行う船乗りや旅行者には危険が伴う。保険が必要だが、まだない。1688年頃、コーヒーハウスを営んでいたエドワード・ロイドが、顧客サービスの一環として、保険を希望している船舶をリストアップした『ロイズ・ニュース』を発刊する。

要するに、17世紀の後半、ないない尽くしのイギリスは、これら無いものをコーヒーハウスという多目的ルームを使用することによって、創り出した。コーヒーハウスは、新しいものの生まれる飼葉桶（かいばおけ）であった。近代市民社会の多くの制度はここで準備された。

さらに、コーヒーハウスは、そこに出入りする人間を近代社会向けに改造する場所でもあった。つまり、ロンドンのコーヒーハウスを特徴づけるもう一つの性格は、それが公的世論形成の場を果たしたことである。コーヒーは人を醒まし、理性的にし、人をお喋りにする液体であった。

「パーラメント（議会）」は、語源的に見ると、「お喋りする場所」の意味を持つ。それぞれのコーヒーハウスには、オピニオン・リーダーが陣取り、顧客一同の利害・関心の代弁者の役割を果たしていた。

コーヒーハウスの雰囲気を中心にあるのは、「判断を異にする人々」の自由な議論を可能にした。会話は、新たな時代の精神を目覚めさせた。セイント・ジェイムズやスミルナ・コーヒーハウスには、ウィッグ党が集い、オズィンダやココア・トゥリーには、トーリー党が陣取った。

コーヒーハウスは、公衆が公権力に向かつてもの申す場であり、私設国会の様相を帯びるようになった。

しかし、1675年12月29日、政府はコーヒーハウスの政治的影響を排除するため、閉鎖を命じる。生活を脅かされたコーヒーハウスのオーナーは、「今後、万全を期して店内の不忠義な会話の予防に留意する」旨を添えた嘆願書を提出する。その結果、ロンドンのコーヒーハウスからは、反政府的ビラや書物が過度に出回ることがなくなります。

でも、これ以降、大英帝国のコーヒーハウスは、以前にもまして賑わったといえます。

次に、個人的には一番馴染みの深い、ウィーンのカフェをみてみたいと思います。

2. ウィーン・カフェの伝統

スティーヴ・ブラッドショー『カフェの文化史』（*2）によると、それは、「夢と都の静かな夜々」として描かれています。

≪ウィーンのカフェ社会派、祭りのように陽気で、自己陶酔的で、疲れ切っていた。・・・

「我々は、実に優雅で美しい華麗なる都会を堪能した」と、音楽評論家のマックス・グラフは書いている。≫（*2）

コーヒー店で世界のあちこちの定期刊行物が広く読まれていたものの、ウィーンの新新聞そのものは、皇帝フランツ・ヨーゼフとその官僚たちによって、オーストリア・ハンガリー二重帝国を革命からも外国の攻撃からも守るため、無器用にしろ効果的に検閲修正されていた。

ウィーンのコffee店には、著名なユダヤ人があふれており、オーストリア文化はほとんどすべて彼等の手になるものではないかと、シュテファン・ツヴァイクは思っていた。

「カフェは社交生活の中心である。

人々はここで用事を処理し、取引をし、最新のニュースを聞き、政府について語り、新しい本や芝居の批評をするのだ。

カフェが、公開討論の場に代わっているのである」

カフェは、常連客にとって、第二の家庭となっていた。ここで郵便物や洗濯物を受け取り、着替えまでできた。

「出版されたあらゆる事物について、また、どこで行われていたとしてもあらゆる演目について学んだ。そして各々の新聞による評価を比較した。

カフェで世界中のできごとのすべてに通じることができ、

同時にそれについて友人たちと語り合えるということ以上に、

オーストリアの知的機動性、国際的な方向の決定に貢献したものはないのではあるまいか」

ジグムンド・フロイトがまだ若かった1880年代、医学には門外漢の20人ほどの友人たちと、カフェ・クルツヴァイルなどに集っていた。のちにカフェの喧騒から距離をとったフロイトだったが、カフェ・ラントマンでしばしば家族と夜を過ごした。

『嫌われる勇気』で再評価されているアルフレッド・アドラーも、カフェ・ツェントラルのようなカフェで、友人や弟子たちと議論を戦わした、といます。

つまり、黎明期の心理学や精神分析学は、ウィーンのカフェで生まれ、育った、といえます。学者や芸術家たちの専門的な組織がほとんどない社会において、カフェにおける諸学合同の社交生活が盛んになりました。

クラウス・ティーレ＝ドールマン『ヨーロッパのカフェ文化』（*3）には、そもそもの「ウィーン・カフェの伝統」がこう紹介されています。

15世紀、コーヒーの栽培はアラビアの特産であり、200年以上もそれが続く。アラビアの

港町モカはコーヒー取引の中心として発展し、その名は今日にいたるまで刺激的な味わいを保証してくれる。コーヒーの木の実を炒ってつくる温かい飲み物を味わうことができたのは、はじめのうちは宗教的な集団、精神集中に役立つことを発見したイスラムの神秘家たちに限られていた。

その後、ペルシャ人やトルコ人たちがこの飲み物の持つ刺激的な作用を知り、オリエントではコーヒーを飲む店が作られていった。そして、16、17世紀になり、この「黒い水」が、ヨーロッパを席卷することとなる。

ウィーン・カフェの伝統・・・

《ウィーンとカフェーこのふたつのイメージはことのほか密接に結び合っているので、ヨーロッパにおけるカフェの営みはウィーンからはじまったと思ってしまうぐらいだ。》（*3）

でも、実際には、1684年に最初のカフェが開かれたウィーンよりも、ヴェニス、ロンドン、パリ、ハンブルクなどの方が早くコーヒーが流行ったことがわかっています。

ウィーンのカフェの魅力・・・

《大理石のテーブルと木の椅子、壁の鏡とシャンデリア、窓際のボックス席、新聞立てとビリヤード台、これらはどのカフェにも見られる調度品だ。座りやすい曲線を持つ椅子は、そのほとんどがぶな材でできている・・・鏡もまた同様にカフェを構成する重要な要素だ・・・自分自身をこっそり映し出し、しかも同時に自分の背後でなにがおこなわれているのか一目で知ることができる客を心地いい気分にもしてくれるのだ・・・》（*3）

ウィーンのコーヒーは、多彩な種類があります。

《こうした選んだコーヒーには、アラブの習慣にしたがっていつもグラス一杯の水がついてくる。》（*3）

人々は、コーヒーと一緒に小さなパンのゼンメル、ウィーンナーソーセージ、トルテやキップフェル（クロワッサン）を食べた。

カフェの最大の収入源は、コーヒーとビリヤードでした。レーフラーノ小路にあったカフェは、音楽の天才でビリヤードの名手でもあった青年にちなんでのちに「カフェ・モーツァルト」と名付けられました。

「ウィーンの人ならばだれもがゆきつけのカフェを持つ」という言葉が残っているように、数

多あるウィーンのカフェには、それぞれ毎日通ってくる常連がいました。

「カフェはわれわれにとって、いうならば住まいのかわりをしてくれるものだ」とカフェの常連の一人、エーゴン・エルヴィーン・キッシュは言っています。

エレガントな「カフェ・ラントマン」には、エメリヒ・カールマン、ハンス・モーザー、マックス・ラインハルトが常連であり、

「カフェ・インペリアル」には、グスタフ・マーラー、リヒャルト・ワーグナー、ヨハネス・ブラームスらの音楽家たちが足繁く通い、

「カフェ・シュベルル」には、画家や建築家たちが集う。

「カフェ・ツァルトル」には、ローベル・ムージル、トーマス・マン、リヒャルト・タウバーら作家たちが通った、といわれています。

ウィーンのカフェの中でも最も有名なものの一つ、「カフェ・ツェントラル」に入ると、正面右側のテーブルに一人の初老の男性の人形が座っています。かつてここに通い詰めた詩人ペーター・アルテンベルクです。彼の作品『わたしの見たまま』に、カフェのことが描かれています。

あれやこれやと悩みが尽きないなら ーカフェに行くことさ！
彼女がとにかく何かまことしやかな理由で来れないなら ーカフェに行くことさ！
ブーツがぼろぼろになったら ーカフェに行くことさ！
給料が400クローネで、支出が500クローネなら ーカフェに行くことさ！
まこと慎ましく暮らしているのに、何の得にも恵まれないなら ーカフェに行くことさ！
気の合う女が見つからないのなら ーカフェに行くことさ！
心の中はもう自殺に追い込まれているのなら ーカフェに行くことさ！
人を嫌い軽蔑しながら、それでも人がいなくちゃ困るなら ーカフェに行くことさ！
もうどうにもつけが効かなくなったなら ーカフェに行くことさ！

シュテファン・ツヴァイクは、「カフェ・ツェントラル」を訪れるたびに、そこで250以上の新聞や雑誌を読むことに喜びを感じていた、といわれています。

短文の名手アルフレート・ボルガーによる『<カフェ・ツェントラル>の理論』によると、カフェ・ツェントラルは、《ほかのカフェのようなカフェではなく、ひとつの世界観である。しかも世界を観ないことを真の内容とする世界観》なのである。

《その住民たちは大部分が、人間嫌い人間好きとの性向が同じぐらいはげしい者たちであり、ひとりでいたいと欲しながらもそのためには仲間を必要とするような者たちだ。

かれらの内面は外界という、境界をつくってくれる層を必要とする。

かれらが個々に発する不確かな声には、コーラスの支えがどうしても必要なのだ・・・

<カフェ・ツェントラール>はつまり、解体された者たちの一種の組織なのだ・・・

ゴシップや好奇心、陰口でわきかえる、大都会の懐に抱かれた片田舎のすみかなのだ。》

このカフェでは、将軍や大臣の振る舞いを俎上にあげておしゃべりするだけでなく、皇帝の生活すらこきおろした。そのため、当局に目をつけられました。

《カフェに出入りする者たちにたいするこの拒否的なコメントを見れば、どうしてこのような場所が、ウィーンにかぎらず、当局からしばしば疑いの目で見られ、ときおり閉店にさえ追い込まれたのかということがわかる。

これらの店ではたんにコーヒーが飲まれただけではなかった。それだけではなくて同時に、あらゆる国民階層にわたって情報が交換され、ニュースが伝えられ、噂が言いふらされて、最高位にある人たちについての個人的なゴシップ、つまり「おしゃべり」が広められたのである。》

また、人々はゴシップだけでなく、世間一般の問題や個人的な問題について、財政や文学のこと、商売や訴訟のこと、学問や芸術のことについて語り合った、といます。

ウィーンのカフェに通っていたのはおもに新しい考えに理解を示すインテリ層だったので、カフェは警察機関から厳重に監視されることとなりました。しかし、パリと異なり、ウィーンの市民は革命を望んでいなかったこともあり、カフェは営業し続けます。

そんなウィーンのカフェに、一度だけ危機が訪れます。それは1810年のナポレオンの大陸封鎖でした。コーヒー豆が入手できなくなった結果、コーヒーの値段が急騰します。当時の様子を、あるジャーナリストの日記には、こう記しています。

《八月一日、ウィーンのカフェではもはや一杯のコーヒーも飲むことができなくなった。

ある雑誌にのしるされたとおり、《あらゆるコーヒー飲みにとってまったくの青天の霹靂》だったのだ。》（*3）

しかし、ナポレオン一世の失脚と同時に、コーヒー禁止令は無用となり、たちまちカフェは再開しました。

3. 黒い革命・パリのカフェ

そして、カフェから革命が生まれたともいわれるパリのカフェ。

1672年、アルメニア人パスカルが、サン・ジェルマンに最初のカフェを出しました。残念ながらこのカフェは成功しなかったが、1689年、フランス革命に先立つ100年前、プロコブができる。カフェ・プロコブは、フランス啓蒙主義、アメリカ独立、フランス革命の時代を通して、勇名を轟かした、といわれています。

歴史家のジュール・ミシュレは『フランス史』の1719年の章を、「コーヒー、アメリカ」と名付け、フランスにおけるコーヒー出現がもたらした歴史的意義をこう述べています。

「パリは一つの巨大なカフェになった。三百軒のカフェが人々のお喋りのために店を開いている。他の大都市、ボルドー、ナント、リヨン、マルセイユなども同様。・・・フランスがこれほどお喋りをしたことはかつてない。

1789年の雄弁術とレトリックはまだなかった。まだルソーを欠いているのだ。・・・能う限り自然発生的なほとばしる才気・・・

この火花を散らす才気の爆発について、その栄誉が部分的には時代の幸福な変動。

新たな生活習慣を作り出し、人々の気質さえ変えてしまった大きな事実、

すなわち、コーヒーの出現に帰されることには寸分の疑いもない・・・

その作用は—今日のようにタバコによる知力低下で弱められも中和されもしなかったのだから—計り知れないものであった・・・」

1789年当時のパリは、地方で仕事がないため、大都会で可能性を試みようとして田舎から出てきた若い知識人で溢れていました。彼らの多くは、郊外の小市民や労働者の家の屋根裏に住み、ルソー、ヴォルテール、モンテスキューなどの啓蒙思想に鼓舞され、街でもらったパンフレットの革命思想に熱狂していた。読み書きできたのはわずか20%であり、若い彼らが、80%の読み書きできない人たちに読み聞かせ、語りかけました。

そして、パレ・ロワイヤルのカフェは、口伝でニュースを集めるほかなかった時代、そこでは、新聞の伏せている事実さえ知ることができ、それに対するさまざまなコメントを聞き、自分の意見を述べることのできる場だった。ここでの言論は、フランス革命へと結晶することになりました。

最後に、ポランニーら、のちの天才科学者たちが集ったブダペストの様子です。

4. ブダペスト・カフェの生活

ウィーンにコーヒーが伝わったのは17世紀終わりなのに対して、ブダとペストではそれより100年も前からコーヒーを飲む習慣がありました。

1900年頃、ブダペストには実に600軒のカフェがあった、といわれています。このカフェの存在は、「貧乏文士のオアシスにして仕事場」でもあった。

《ひとりの客がたった一杯のコーヒーとグラス一杯の水だけで何時間もねばっていても、とやかくいう者などだれもいなかったのである。

水がなくなると、なにも言わずにすぐグラスに注いでくれるのだ。

竹の枠には地方のや世界各国の新聞、雑誌がぶらさがっている。

手紙を書いたりメモをとりたいたいと思えば、紙とペンとインクを出してくれる。》

多くの新聞記事や掌編小説、劇評が、ブダペストのカフェのテーブルから生まれた。

「カフェ・ニューヨーク」は、1894年、宮殿のような建物の中にオープンする。建築家アラヨシュ・ハウスマンによって設計されたが、彼は王宮の改装も任された著名な建築家であり、このことは、いかにカフェが重要なものと思われていたかの証左でもある。

「作家専用」と書かれたメニューは、わずかな金額で、パンと薄切りソーセージたっぷり、というものだった。一階上のギャラリーには、すでに名を成した作家たちが席についていた。

エンドレ・アディが1908年、文学雑誌『ニュガト（西）』を育て上げたこの場所は、何十年もの間、文筆家たちのたまり場となりました。

他の都市と同じく、多くのカフェが知的生活の中心となったように、時々政府にしばしば不穏な動きの火元と見なされていました。

1848年、パリの2月革命、ドイツとオーストリアの3月革命のニュースがハンガリーにも届くと、「カフェ・ビルヴァックス」で、『立て、マジヤール人よ！』と題されたベティーフィの詩が読み上げられます。このベティーフィの行った革命の呼びかけとともに、オーストリア支配に対するハンガリーの蜂起が始まります。

しかし、この蜂起は、ロシア皇帝軍の助けを借りたハプスブルク家により鎮圧されます。詩人ベティーフィは戦場で死亡、国民的英雄と讃えられたコシュートは辞任、国を去り、リベラルなバッチャーニ伯は処刑されました。

一つのカフェから始まった劇的な出来事は悲劇的な結末を迎えたのでした。

ロンドンのカフェが、単にコーヒーを飲み、沈思黙考、談論風発するのみならず、新聞発行、郵便制度、株式取引所、保険業、そして私的議会まで、近代市民社会的なものを準備した多目的ホール、「新しいものの生まれる飼葉桶（かいばおけ）」であったことに驚きます。

そして、談論風発の中で、議会制民主主義の下地ができ、ウィーンやブダペストでは、反政府

活動を封じられる一方、フランスにおいては大革命につながりました。

ワールドカフェ方式ではないですが、カフェ文化の持つ良き部分を、公私ともに取り込んでいきたいと考えています。

(* 1) 臼井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る—近代市民社会の黒い血液』(中公新書)、1992年刊

(* 2) スティーヴ・ブラッドショー『カフェの文化史』、訳・海野 弘、三省堂、1984年刊

(* 3) クラウス・ティーレ=ドールマン『ヨーロッパのカフェ文化』、訳・平田 達治、友田和秀、2005年刊